



『雪国』の冒頭文の日本語らしさをめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山岡, 實 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009935

『雪国』の冒頭文の日本語らしさをめぐって

山 岡 實

はじめに

川端康成の『雪国』の有名な冒頭文「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」は、日本語らしい名文としてよく引用される表現である。が、なぜ、そう言えるのであろうか。

本稿では、これまで行われてきた『雪国』の冒頭文の分析および日本語の物語の冒頭文における「語り」の様式（以下では、「伝達様式」と呼ぶ）を参考にして、『雪国』の冒頭部分の分析を行い、なぜ、『雪国』の冒頭文が、日本語らしい名文と言えるのかを考えてみる。

1 従来 of 分析

まず、これまで行われてきた『雪国』の冒頭文についての分析をいくつか取り上げ、その評価できる点、問題となる点を指摘していく。

1.1 まず、工藤（1995）では、「〈かたり〉の主導時制形式は、基本的に、過去形である。そして、この過去形の意味・機能は、現実の発話行為時へのダイクティックな関係づけなき〈叙事詩的時間〉の提示であって、poetic な機能が前面化される」とする。そして、次の『雪国』の冒頭部分では、「一貫して、過去形が使用されているが、読者は、物語世界という虚構の舞台を同時進行しているかのように感じる」とする。

- (1) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた。
信号所に汽車が止まつた。

向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。

「このようなダイクティックなテンスの意味をもたない過去形の使用方法は、欧米では、〈epic preterite (叙事詩的過去)〉と名付けられて」いる。そして、「過去形がダイクティックなテンスの意味を失うことによって、出来事間の時間的流れ (アスペクト的意味と相関するタクシスの機能) こそに焦点があてられる」とする。

ところが、この〈epic preterite (叙事詩的過去)〉というのは、基本的時制が過去時制であり、動詞の時制が全て過去時制で表現されるドイツ語やフランス語などの西欧語の物語に対して用いられた術語である。周囲の全ての動詞が過去時制である西欧語の場合と事情が大きく異なっているにもかかわらず、それを「タ」形と「ル」形が混在して用いられる日本語の物語にも、そのまま適用することには、大いに問題がある。微妙な意味機能を有する日本語の物語における「タ」形を、単に、〈epic preterite (叙事詩的過去)〉として片付けるのは、余りにも、安易すぎる。¹

1.2 次に、熊倉 (1990) では、「小説『雪國』には、血肉をそなえた語り手は登場しない。しかし、そのテキストは、誰かが汽車の窓から観察していることが明らかな文章で書かれている。「私」的で「主観的」な表現だ。(トンネルを)「抜ける」という動詞は、語り手自身が汽車と一体になって行う動作で、「雪國であった」の「……であった」は、誰かが「雪國だ」という判断を下している表現だ。このテキストには覆面の語り手がいるわけだ」とする。

「(トンネルを)「抜ける」という動詞は、語り手自身が汽車と一体になって行う動作」であるという指摘には同意できるし、「「雪國であった」の「……であった」は、誰かが「雪國だ」という判断を下している表現だ」もその通りである。ただ、その判断を下しているのは誰かと言うと、「覆面の語り手」

1 山岡 (2000) では、日本語の物語における「タ」形には、様々な意味機能が存在することを指摘している。詳細については、山岡 (2000) を参照。

問題は、この意識の主体は、一体誰であるかということである。熊倉（1990）では、「この文章を書いた人」であり、森田（1998）では、「作者自身」であるとしている。が、作者は、虚構上の人物ではなく、現実の生身の人間であり、物語の規約上、当然、物語世界に登場することはできない。作者は、物語の創作主体であり、物語世界の事態を物語世界の現場で見たり、語ったりすることはできないのである。また、記号論的観点からすると、全ての言語表現には、言表行為の主体である *Speaker* が必ず存在し、*Speaker* の「今」と「ここ」を全ての発話の直示的基盤として、*Speaker* と *Hearer* によるコミュニケーションが行われる。物語の場合も例外ではなく、必ず、*Speaker* が存在する。物語の場合、この *Speaker* が、語り手あるいは語り手としての登場人物である。が、ここでは、この *Speaker* が、作者と混同されて用いられていることになる。それでは、この意識の主体は、誰であろうか。

尚、荒木（1994）では、上の両者とは違った解釈をしている。まず、「「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。人口に膾炙した名文であるが、この短い文章が何故に名文とたたえられるのだろうか」と問いかける。そして、その答えとして、「川端の原文にあってはトンネルを抜けた主体が明らかにされていない。長いトンネルを抜けたのは主人公のようでもあるし、列車のようでもある。つまり主人公とも、列車ともいえる主客合一した何かがトンネルを抜けたのである。川端の原文が名文といわれる所以は実にこういった主客合一の世界、主客を超越した描き方で対象世界を表現してみせたからである」と指摘する。ここでは、トンネルを抜けたのは、「主人公とも、列車ともいえる主客合一した何か」、少なくとも、主人公の可能性もあり得ると指摘されている。

先に提起された意識の主体の確定化の問題に入っていく前に、日本語の物語の冒頭文における伝達様式について触れておかなければならない。

2 日本語の物語の冒頭文における伝達様式

日本語の物語の冒頭文における伝達様式は、典型的に、次の三つのタイプに大別することができる。

2.1 まず、一番目のタイプの伝達様式では、語り手は、発話時点 Now₁（問題の事態の起こった何年か後の場合あるいは不詳の場合がある）から、①物語世界の事態を過去のものとして語ったり、②その過去の事態について説明的・評価的に語ったりする。

次の事例 (3) と (4) は、それぞれ、①と②の場合の典型例である。

(3) 鮎太と祖母りょうの二人だけの土蔵の中の生活に、冴子という十九歳の少女が突然やって来て、同居するようになったのは、鮎太が十三になった春であった。

冴子という名前は、それまでに祖母の口から度々聞いていたが、鮎太が彼女の姿を見たのは、その時が初めてであった。

……

その日、鮎太が学校から帰って来ると、屋敷と小川で境して、屋敷より一段高くなっている田圃の畔道を両肘を張るようにして、ハーモニカを吹いて歩いている一人の少女の姿が眼に入った。少女と言っても鮎太よりずっと年長である。

(井上靖『あすなる物語』)

事例 (3) の冒頭文では、語り手は、語っている「今」（談話コンテキストからは不詳の発話時点 Now₁) から見て、「鮎太」と「冴子」という少女との同居が始まったのは、「鮎太が十三になった春」のことであった、と語っている。そして、語り手は、「鮎太が十三になった春」の「その日」の出来事に話を進めていき、具体的に物語を開始していく。この場合、冒頭文では、語り手は、発話時点 Now₁ から、「鮎太」と「冴子」の同居の始まりを、「鮎太が十三になった春」の過去の出来事として語っていることが分かる。

(4) 十年をひとむかしというならば、この物語の発端はいまからふたむかし半もまえのことになる。世の中のできごととはといえば、選挙の規則があらたまって、普通選挙法というのが生まれ、二月にその第一回の選挙

がおこなわれた、二か月後のことになる。昭和三年四月四日、農山漁村の名がぜんぶあてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村へ、わかい女の先生が赴任してきた。

……

そうして、昭和三年の四月四日にもどろう。その朝、岬の村の五年以上の生徒たちは、本校まで五キロの道をいそいそとあるいていた。みんな、それぞれ一つずつ進級したことに心はずませ、足もともかるかったのだ。

(壺井栄『二十四の瞳』)

事例 (4) の冒頭文では、語り手は、語っている「今」(「この物語の発端」から「ふたむかし半」後の発話時点Now₁) から、「この物語の発端」がいつのことであるかを語っている。そして、その後に簡単にその当時の世相などについて語り、具体的に「わかい女の先生が赴任してきた」昭和三年四月四日の物語を開始していく。この場合、冒頭文では、語り手は、発話時点 Now₁ から、「この物語の発端」について説明的に語っていることになる。

2.2 次に、二番目のタイプの伝達様式では、語り手は、物語の冒頭文から既に物語世界のある時点Now₂に存在していて、その存在している時点から、眼前の事態を語る。次の事例 (5) を見てみよう。

(5) 或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下に、この男の外に誰もいない。唯、所々丹塗りの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。……

一尤も今日は、刻限が遅いせいとか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面

砲を気にしながら、ぼんやり雨のふるのを眺めていた。

(芥川龍之介『羅生門・鼻』)

事例 (5) では、冒頭文の「或日の暮方の事である」から分かるように、物語っている「今」が「或日の暮方」である。もし、冒頭文が「或日の暮方の事であった」となっていたなら、物語っている「今」は、発話時点 Now₁ であり、その時点から見て「或日の暮方」を過去の一時点として語っていることになる。また、アンダーラインの「この男」の「この」から明らかなように、語り手は、「この男」、つまり、「下人」と同空間に存在していることが分かる。この場合、冒頭文には、どの登場人物の視点の支配も感知できず、物語世界の現場に既に存在していて、発話時点 Now₂ から、目の前で知覚している「下人」について語っている語り手が存在することが分かる。つまり、この冒頭文では、語り手は、物語世界の発話時点 Now₂ から、「下人」が羅生門の下の石段に座って、雨のふるのを眺めている様子を語っていることになる。

また、物語の冒頭文で過去のある特定の時点述べ、すぐに物語世界のその時点に移行し、その移行した時点から、眼前の事態を語るという一番目と二番目のタイプの中間的タイプの伝達様式が見られる。次の事例 (6) を見てみよう。

(6) 明応八年（一四九九）秋。

月の光に中国山脈の山並みが、影絵のように黒く浮かび上がっている。

その底知れない静けさを抱き込んだような黒々とした中腹に、奇妙に動く一点の光があった。それはひっそりとした明かりだったが、目をこらすと、とどまりもせず、消えそうできて消えず、ゆっくり南のほうへ進んでいた。

(内館牧子『毛利元就（上）』)

事例 (6) の冒頭文では、語り手は、まず、発話時点 Now₁ から、「明応八年秋」と過去のある特定の時点述べ、次の物語文では、すぐにそのまま「明応八年秋」の時点の中国山脈の山並みが見える場所に移行している。そして、そ

の移行した語り手が、その物語世界の現場で、「月の光に中国山脈の山並みが、影絵のように黒く浮かび上がっている。その底知れない静けさを…… ゆっくり南のほうへ進んでいた」と目の前に見える情景を語っている。

2.3 さらに、語り手は、登場人物の視点へ移入すると、自らは姿を消すため、三番目のタイプの伝達様式では、登場人物が物語世界の事態を目の当たりに知覚・体験し、登場人物自身はその知覚・体験している事態を発話時点 Now₂ で語る。次の事例 (7) を見てみよう。

(7) 駐車場には、約束の時間より早めに着いた。

^(a)車を降りると、湿気を多く含んだ七月の濃い闇に包まれた。^(c)蒸し暑い^(b)せいか、闇が黒々と重く感じられる。

香取雅子は息苦しさを覚えて、星の出ているいない夜空を見上げた。^(d)冷房^(e)の効いた車内で冷やされ乾いた皮膚が、たちまちねっとり汗をかきはじめる。

(桐野夏生『OUT アウト』)

文 (a) の「約束の時間より早めに着いた」と感じたり、文 (b) の「七月の濃い闇に包まれた」り、文 (c) の「闇が黒々と重く感じられる」意識の主体が誰か不明であるが、文 (d) で、初めて、その意識の主体が「香取雅子」であることが判明する。一見、文 (a) から文 (c) の文は、語り手が、物語世界の現場 Now₂ で、眼前の事態を語っているという二番目のタイプの伝達様式を反映しているかのようなようであるが、談話コンテキストから判断して、登場人物「香取雅子」が眼前の事態を語っている伝達様式を反映していることが分かる。例えば、文 (b) の「車を降りる」のは誰かと言うと、語り手ではなく、登場人物の「香取雅子」であり、「香取雅子」が「車を降りると、湿気を多く含んだ七月の濃い闇に包まれた」とする方が自然な解釈である。この場合、冒頭文（を含めて以下の二つの文）では、登場人物「香取雅子」が、発話時点 Now₂ で、眼前の事態を知覚すると同時に語っていることになる。

本来、日本語の物語では、語り手は、登場人物と一体化し易く、登場人物

が物語世界の現場 Now₂ で知覚・体験すると同時に語るという、いわゆる内的独白としての伝達様式が頻繁に用いられる傾向があるが、冒頭文でも、このように内的独白としての伝達様式を反映する場合が多い。特に、冒頭部分の場合、最初は、語っている意識の主体は誰か不明であるが、読み始めてからしばらくして判明する、というスタイルを取る場合が多く見られる。²

3 『雪国』の冒頭部分の分析

以上のことを参考にして、ここでは、まず、『雪国』の冒頭部分の分析を行っていく。具体的に言うと、『雪国』の冒頭部分は、前章で述べた、日本

2 極端な場合、次のような事例が見られる。

廃工場を夢に見た。

冷え冷えとした銅色の闇の天上を、打ち捨てられたまま手入れも掃除もされることなく錆びつき腐食してゆく金属のパイプが、右に左に迷走している。広い工場のあちこちに、複雑な形に組み合わされた機械が機能を停止したままうずくまり、それらのあいだを鉛色のベルトコンベアが結んでいる。すべてがしん—と動かない。

どこかでゆっくりと水が滴っている。夢の中でさえも眠りを誘うようなその単調な音は、あたかも絶命間際の者のかすかな脈拍のようだ。……

手を伸ばし、水に触れた。

冷たい。夜のように。

水は黒かった。オイルに似て、指にまとわりつき、粘ついた。……

だが、手のひらのなかの水は次第次第に体温を移し取り、生ぬるくなっていく。それもはっきりと感じ取ることができる。指を開いて水をこぼそうとする。……

そこで目が覚めた。

眠りのスイッチを切ったかのように、唐突で完璧な目覚めだった。開いた目に白い天上が見えた。部屋の明かりは、枕元のスタンドひとつを除いて全部消してある。

青木淳子は、小さなベッドの上に跳ね起きた。温かな布団をまくりあげると、両手のひらでばたばたと叩いた。

(宮部みゆき『クロスファイア』)

ここでは、1ページ半にわたって、延々と、誰かある意識の主体の、眼前の事態を知覚・体験すると同時に語るという、内的独白スタイルの文が続いているが、2ページ目にやっと、その意識の主体が青木淳子であることが分かる。

語の物語の冒頭文における典型的な伝達様式タイプのうちどのタイプの伝達様式を反映しているのかを示し、さらには、冒頭部分に遍在している意識の主体は誰かを確定化していくことになる。そして、次に、この冒頭部分の分析結果に基づいて、『雪国』の冒頭文それ自体の伝達様式のタイプおよび冒頭文に遍在している意識の主体を考えてみる。これまでの『雪国』の冒頭文の分析では、分析対象は、まさに冒頭文だけのものが多く、長くても、せいぜい、先にみたように、文 (a) から文 (c) までである。しかしながら、冒頭文の分析とは言え、冒頭文は物語テキストを構成する連続した物語文の中の一文であり、妥当な位置づけを与えるには、さらに分析の範囲を以下に示す文 (d) 以上に拡大していく必要がある。

3.1 まず、『雪国』の冒頭部分を見ておこう。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。 夜の底が白くなった。
 (a) (b)
信号所に汽車が止まった。
 (c)
向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。 雪の冷
 (d) (e)
気が流れこんだ。 娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、
 (f)
「駅長さん、駅長さん。」
明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳
 (g)
に帽子の毛皮を垂れていた。
もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが
 (h)
山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に
呑まれていた。

冒頭文 (a) では、誰か分からないが、汽車に乗っている意識の主体が、トンネルを抜けたまさにその時点で、車窓から外の真っ暗闇の景色を眺めて、「(そこが) 雪国であることに今気づいた」と語っていることが示されている。文 (b) では、しばらくして、同じ意識の主体が、車窓から外の様子を眺めて、「夜の底が白くなる」という出来事が、文 (c) では、さらに、時が経過してから、「信号所に汽車が止まる」という出来事が、それぞれ、眼前で「今」まさに

完了したものとして語っていることが示されている。このように、文 (a) から文 (c) までを読む限りでは、一見、語り手が、既に存在している物語世界の発話時点 Now₂ で、眼前の事態を語るという二番目のタイプの伝達様式が支配しているように見える。

が、文 (d) に注目してみよう。文 (d) の「向側の座席から娘が立って来て」の「向側」とは、誰の「向側」であろうか。また、「娘が立って来た」のは、誰の方に「立って来た」のであろうか。この冒頭部分の談話コンテクストから判断すると、これまでと同じ意識の主体の「向側」であり、その意識の主体の方に「娘が立って来た」とすることができる。この文 (d) の前半部分では、冒頭文から遍在している同一の意識の主体が、向側の座席から娘が立って来るのを知覚すると同時に、「向側の座席から娘が立って来て」と語っていることが示されている。ここで、この意識の主体が、二番目のタイプの伝達様式を遂行する語り手であるとしたら、どうなるであろうか。文 (d) の後半部分では、物語世界 Now₂ に存在している語り手が、娘が「島村の前のガラス窓を落とす」という眼前の行為を、「今」まさに完了したものとして語ることになる。が、果たして、そうであろうか。まず、二番目のタイプの物語行為が支配的になるのは、どの登場人物（特に主人公）も登場しない場面においてであるという条件が存在する。ここでは、『雪国』の主人公「島村」が登場している。そして、冒頭文で汽車に乗って「国境の長いトンネルを抜ける」意識の主体は、語り手よりも主人公「島村」とする方が、また、「雪国であった」、つまり、「雪国であることに今気づいた」認識主体は、語り手よりも主人公「島村」とする方が、後の筋の展開からすると、妥当である。文 (d) の後半部分（「島村の前のガラス窓を落した」）では、語り手が、それまで一体化していた意識の主体を「島村」と呼んで客体化し、一旦その意識の主体の内面から遊離していると解釈する方が自然である。（その証拠として、「島村の」を省略して読んでみると、文 (d) 全体が、それまでと同じ意識の主体が知覚した娘の一連の行為を語っていることを示していることが分かる。）

このようにして、文 (d) の後半部分で、遍在する意識の主体を「島村」と客体化することにより、我々読者には、この意識の主体が、ついに、「島村」

であることが判明する。「島村の」と言った後、すぐに、語り手は、登場人物「島村」と一体化し、「島村」の目から見た娘の行為（「前のガラス窓を落した」）が語られている。次の文（e）でも、語り手は、登場人物「島村」と一体化したままで、「雪の冷気が流れこむことを今認めた」という「島村」の認識が語られている。文（f）・（g）でも、同じように、「島村」が見たり、聞いたりすると同時に語っていることが示されている。文（h）では、「もうそんな寒さか」まで、語り手は、「島村」と一体化しているが、「と」で少し遊離し、「島村は」と主題化して、彼から完全に遊離し、彼の「外を眺める」動作を観察する。「鉄道の官舎」からは、再び「島村」と一体化し、「島村」の「外を眺めた」時の外の様子についての認識が語られている。

3.2 このように、『雪国』の冒頭部分では、時折、登場人物を客体化する語り手の存在が垣間見れるが、登場人物が物語世界の事態を目の当たりに知覚・体験し、登場人物自身はその知覚・体験している事態を発話時点 Now₂で語る、という三番目のタイプの伝達様式が支配していることになる。従って、『雪国』の冒頭部分に遍在している意識の主体は、熊倉（1990）で言う「覆面の語り手」・「この文章を書いた人」や森田（1998）で言う「作者」ではなく、荒木（1994）で示唆しているように、登場人物「島村」であるということになる。³ また、文（a）から文（c）の「夕」形は、工藤（1995）で指摘されているような「叙事詩的過去」と呼ばれる過去形ではない。ここでの「夕」形は、語り手としての登場人物が、物語世界の事態を、どのような様相をもつものとして認識したかという、登場人物の物語世界の事態についての認識を反映するものである。従って、文（a）の「夕」形は、登場人物「島村」の発話時点での認識の有り様を反映する気づき・発見の「夕」であり、文（b）と文（c）の「夕」形は、登場人物「島村」が発話時点の「今」それぞれの出来事が実現したことを認

3 池上（2000）でも、同趣旨のことが述べられている。池上（2000）では「主人公は汽車に乗っている — それも、トンネルに入ると、機関車の吐く煙の煤が入ってこないように窓を閉めていなくてはならなかった頃のものであろう — それが漸くトンネルを出て、一面雪に覆われた銀世界に出て来たところなのだ」と指摘されている。

める完了の「タ」である。⁴

この冒頭部分では、一人の意識の主体、つまり、登場人物「島村」が遍在していて、冒頭文「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」では、意識の主体である登場人物「島村」が、トンネルを抜けたまさにその時点で、車窓から外の景色を眺めて、「(そこが)雪国であることに今気づいた」と語っていることが示されていることになる。後続する物語文でも、登場人物「島村」が遍在していて、「島村」が、発話時点 Now₂ で、眼前の事態を知覚すると同時に語るという、いわゆる内的独白としての伝達様式が続いている。

そうすると、当然、『雪国』の冒頭文でも、三番目のタイプの内的独白としての伝達様式を反映しており、冒頭文に遍在している意識の主体は、登場人物「島村」であるということになる。また、第2章で見たように、日本語の物語の冒頭部分の場合、最初は、語っている意識の主体は誰か不明であるが、読み始めてからしばらくして判明する、というスタイル取る場合が多く見られるが、『雪国』の冒頭文も、その典型的な一例である。まさに、『雪国』の冒頭文も、日本語の物語の冒頭部分に典型的な情報の流れの一端を担っていることになる。

おわりに

以上のように、分析の範囲を冒頭文を含むもっと広い談話コンテクスト（冒頭部分）に拡大して分析を行った結果、『雪国』の冒頭文は、日本語の物語の冒頭文における伝達様式タイプのうち三番目のタイプの内的独白としての伝達様式を反映していることが分かった。また、内的独白としての伝達様式を反映する物語文では、その談話コンテクストに知覚・体験すると同時に語る意識の主体が遍在しているため、その意識の主体は、主語として言語化されることはなく、いわゆる主語の省略が起こる。そのため、『雪国』の冒頭

4 尚、文 (d) と文 (e) の「タ」形は、意識の主体がそれぞれの出来事が発話時点の「今」実現したことを認める完了の「タ」であり、文 (f) と文 (h) の「タ」形は、発話時点での意識の主体の認識の有り様を反映する気づき・発見の「タ」である。

文も、遍在している意識の主体は不明であり、しばらくして「島村」であることが分かる。このように、『雪国』の冒頭文は、日本語の物語の冒頭部分に典型的な情報の流れ、つまり、冒頭文に遍在している意識の主体は、当初、誰か不明であるが、しばらくして、判明するというテキスト構成の一端を担っていることになる。さらに、池上（2000）によれば、『雪国』の冒頭部分では、「語り手も自らの語る状況の一部」になっていて、「見る、そして語る〈主体〉と見られる、そして語られる〈客体〉という対立は、そこには存在」せず、日本語独特な「〈主客合体〉の状況がことばを通じて演出」されている。

そうすると、『雪国』の冒頭文が日本語らしい名文であると言われる所以は、(1)日本語の物語に典型的な内的独白としての伝達様式を反映している点、⁵ (2)日本語の物語の冒頭部分に典型的なテキスト構成の一端を担っている点、(3)日本語の物語に独特な「〈主客合体〉の状況がことばを通じて演出」されている（川端康成の場合、一層、研ぎ澄まされた形で）点、これら三つの特徴を同時に兼ね備えているからであると言える。

5 池上（2000）では、「ある状況を見たり、あるいはそれについて語るという場合」、二通りの演出の仕方があるとする。一つは、「見たり語ったりする主体は自分の見たり語ったりする状況の外に自らを措定し、そこから言わば状況を観察する第三者としてその状況を読みとるという」ものであり、もう一つは、「その状況の内に自らを措定し、状況に臨場する当事者としてその状況を読みとるという」ものである。「私たちが何かを見たり、何かについて語ったりするという営みのもっとも本来の、〈元型〉的な姿といえ、疑いもなく、後者のタイプ、つまり、私たち自身が当事者として臨場し、直接〈いま〉、〈ここ〉で身をもって体験しているという構図のものであろう」とする。そして、「日本語の話し手は元型的な体験の構図への拘りを（西欧的な言語の話し手と較べて）かなり多く保持しているように思える」とする。まさに、日本語の物語における内的独白としての伝達様式は、この「元型的な体験の構図への拘り」を如実に示すものである。

因みに、『雪国』の冒頭文は、英語では、Seidenstickerにより、次のように翻訳されている。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

参考文献

- 荒木博之. 1994. 『日本語が見えると英語も見える』中央公論社.
- 池上嘉彦. 1999. 「日本語らしさの中の〈主観性〉」『言語』Vol. 28, No.1, 84-93.
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』講談社.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 熊倉千之. 1990. 『日本人の表現力と個性』中央公論社.
- 森田良行. 1998. 『日本人の発想、日本語の表現』中央公論社.
- メイナード. K. 泉子. 2000. 『情意の言語学』くろしお出版.
- 山岡實. 2000. 『「語り」の記号論—日英比較物語文分析』松柏社.